

かりが住んでいる村で、叔母に子どもが出来ないのは叔母のせいだということになっていた。それでも叔母はひとり広い厨房に立ち、夫が獲ってきた大小の魚を捌き続けた。

盆は夫の親戚の墓の清掃を任されていた。何度も法事の手続きをこなしてきて、作業はお手のものだった。私もこの墓に入るのだろうと叔母はなんとなく思っていたが、よく考えると身内では誰もこの作業を引き継いでくれる人はいないのだった。

ある日、叔母はダブルベッドの中で自分が西枕で寝ていたことにふと気がついた。初めてこの家に入った時に窓から見えた、海を反射する光などを思い出して、ひとりで憂鬱な気分になった。

叔母はわたしをゲームセンターに連れていってくれたことがある。母に禁止されていたため、入ったのはその一度だけだ。自動ドアが開く瞬間は、まるで未来でも過去でもない怪物に呑み込まれていくようだった。ガラスケースの中に隔離されたメダルや白い宝石たちは、現実の誰の汗や笑顔より輝いていると思った。鼓膜が破れるほどキラキラした音が、いつもの身体の嫌な部分をかき消してくれる気がした。

「宝箱の中にいるみたいだろう。普段叶えられないことが、ここではできる。自分次第で、欲しいものが手に入る。こっちのもんさ。」

興奮してニヤリと口角を上げる叔母の瞳は、近くで見ると少し青みがかかり、澄んでいて綺麗だった。そんなふうに、その日は一晩中ゲームセンターの中で、叔母と「宝探し」の冒険をしていた。

夜が沈んだような朝、叔母が運転する車の中で、自分で獲ったチャームたちを眺めていた。魔法が解けたって、自分で獲ったマスコットたちだった。その後脳が溶けるほどの睡魔が襲い、タバコの匂いが漂う車内でわたしはようやく眠りについた。

ネオン色のマスコットたちが、スクールバックに吊る下がっている。無限にあると思っていた可能性を捨てる時期が近づき、教室は静かにざわついていた。塾に